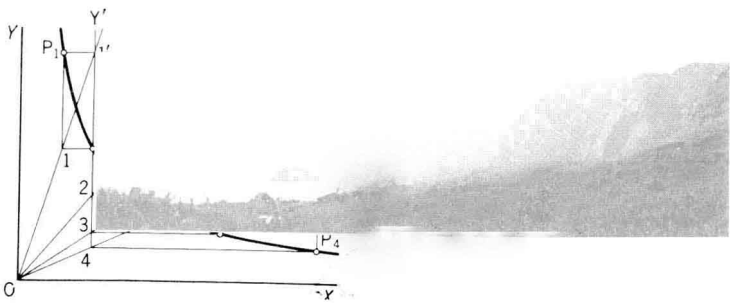
風に咲くプアマレ

渡辺喜恵子

風に咲くプァマレ

渡辺喜恵子



新潮社版

風に咲くプァマレ

一九七六年六月一五日　印刷
一九七六年六月二〇日　発行

定　価／九〇〇円
著　者／渡辺喜恵子
発行者／佐藤亮一
印刷所／東洋印刷株式会社
製本所／大口製本株式会社
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)二六六-五一一一
　　編集部(03)二六六-五四一一
郵便番号　一六二一
振替　東京四-八〇八
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kieko Watanabe, 1976 Printed in Japan

風に咲くプァマレ■目次

真珠湾　5
二世部隊　30
日本人　50
ニイハウ島　76
凱旋　125
鷹渡り　131
草むす　143
浜比嘉島　161
野晒しの刑　175
祖国敗戦　196
ラナイのある家　206
琉球国　215
空木返し　233
風に咲くプァマレ　250

装幀　野中ユリ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

風に咲くプァマレ

真珠湾

カパカヒ・ロードを、大きな荷物を肩に担いだ男が左手の荷物を引摺るようにして歩いていた。日焼けした、もみ上げの長い横顔に西陽が照りつけ、影ぼうしが足許から足許から伸びはじめている。荷物が重いのか、男はときどき立ち止まって右と左の荷物を持ち替えた。

一九四一年の十月はじめのことである。与那原立裕はその日ホノルル港へ入った船でひょっこりわが家へ戻って来たのだ。

鶏に餌を与えていた美穂は、その手を止めて、だんだん近づいてくるその男を、訝しげにじいっと瞶めていた。

なんだってあんな大きな荷物を担いでいるんだろう——男は帽子を被り直した。

美穂も鶏の餌をばら撒いた。美穂が餌を撒く度にゴゴゴッと鶏は咽喉を鳴らし足許を駈け巡る。餌籠がからになると、美穂は逆さにして底をぱんぱん叩く。餌をついばむ鶏はその音にびっくりするのか慌てふためいて一斉に羽音を立てながら飛び退くのがなんともいじましい。毎日、繰り返してやることなのに、臆病なのか要心ぶかいのか、鶏は一向に馴れない。なぜ馴れないのだろう。蹴爪も持たないダックの方がよっぽど呑気だ。

餌をやり終わるとクロトンの垣根へ行ってみた。荷物を持った男のことが気になったからだ。
「おおい」
キャベの木立の前で一休みしていた男は、美穂の方に手を振った。
変な男、くるりと美穂が背を向けると、
「俺だヨ」
と、男はじれったげに荷物を放り出して怒鳴りながら走って来た。
「まあー」
美穂は己の眼を疑ぐり、餌籠を捨ててクロトンの枝に獅嚙(しが)みついた。与那原なのだ。夫が帰って来たのだ。まだ餌をついばんでいる鶏を蹴散らすように、夢中で駈け出した。
「お帰んなさい」
「なにしているんだ」
与那原は、舌打ちをしながら荷物を取りに戻った。美穂はあとを追わなかった。忌々(いまいま)しいほど胸がはずんでくる。
突立っている美穂に荷物を押しつけると、
「亭主を見忘れる奴があるか」
と与那原はまた怒鳴った。
相変らずだわ、帰る早々から威張っているんだわ。それでも嬉しさのこみ上げてくるのはどうしたわけなんだろう——重い荷物だった。両手でやっと持上げながら美穂は言った。
「だって、それあ忘れますよ。便り一本もよこさなかったじゃないの」
「馬鹿ヤロ、たった四月じゃないか」
「たった、たった四月ねえ」

ドアを開け、荷物を入れたが、あいた口がふさがらない。四カ月も家を留守にして、その間、妻子がどんな思いで暮していたか、この男にどう説明してやったらいいのだろう。美穂はそれでも頬にのぼってくる喜びが隠せなかった。帰って来たんだわ、帰って来たんだから、文句は言うまい——。

「おおい、子供達はどうしたんだ」

「おりますよ、そんな大きな声を出さなくとも」

美穂は夫の顔をまじまじと瞶めて訊いた。

「お姑さんはどうでしたの、まさか亡くなったりしたんじゃないでしょうね」

娘達は突然の父親の声に、びっくりした表情で集まって来た。

「おふくろは元気だ。はるばる沖縄までも行かんでよかったんだ。馬鹿みたようなもんさ」

「そんなことを言って、はるばるあんたが見舞に駈けつけたから元気になったんでしょう」

「そうだ。お前によろしく伝えてくれと言っていたぞ」

「孫を見たいと言ってませんでしたか」

「言ったよ」

「だから連れて行けばよかったんですよ」

そうすればどんなにか私も気が楽だったかしれないのに、と言いかけて美穂は口を噤んだ。与那原が押っ被せるように怒鳴ったからだ。

「そんな呑気なことを言っている情勢じゃないんだ」

「やっぱり——」

「ああ、神戸で二週間も船待ちして、やっとこさ、乗せて貰えたんだ。船は日本からの引揚げ者でいっぱいだ」

「始まるんでしょうか」
「なんとも言われんなア」
美穂はもう一つの重い荷物をひったくるように夫の肩から降ろしてやったが、おかしいほど胸がどきどきして呼吸が苦しかった。
満腹した鶏が大きな声で鳴いている。
「菊夫はまだ学校か」
「いいえ、今日帰るとわかれば波止場まで出迎えさせたのに、あんたって本当に鉄砲玉みたいな人だから」
伸びかかった不精髭が気になるとみえ、しきりに頤の辺りをなでながら与那原はぐるぐる家の中を見廻す。
「すぐに帰って来ますよ」
「ああ」
何も変っていないことに安堵したのか、椅子を引寄せてどかりと腰を降した。美穂は茶の仕度にとりかかった。
「沖縄はどうでしたの」
「べつにどうってこともないね」
旨そうにコーヒーを啜りながら与那原は首を振った。国際情勢はともかく、何十年振りかで帰った沖縄も、四カ月振りで戻ったハワイも、格別に変ったと思われることは何もないのだが、何か追い立てられるような気分だけは隠せなかった。
「もう戻って来ないのではないかと思っていましたよ」
「なぜだ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「不安で、ただなんとなくそんな気がしてたんです」
美穂は涙ぐんでいる自分に気付き、面を伏せた。妻子を忘れずによく戻って来ましたねと、夫に言うのもおかしなことだった。
「なんだお前、泣いているのか」
「いいえ」
慌てて立ち上り、前掛けの端でそっと涙を拭うと、涙はとめどもなくあふれる。夫に背を向けると、与那原は黙って床に坐り込み、土産の包みを解きはじめた。
「これはおふくろからだ」
「私にですか」
「そうだ。早く開けてみろよ」
風呂敷包みを解くと、さらに油紙につつんである姑からの贈りものは紬の反物だった。
「まあ、これが琉球絣というんですか」
「ああ、おふくろが織ったんだ」
「お姑さんは機織りもなさるんですか」
「いまは眼が薄くなって、細かいものはとても駄目だと言っていた。これは昔、織ったものなんだ。自分で糸をつむいで、染めて織ったんだ。おふくろは若い娘達に教えるほどの腕を持っていたんだが、ハワイへ来て黍畑で働いているうちにすっかり手が鈍ってしまったそうだ。それでも沖縄へ戻ってからまた少しずつ織っていたというから、織るのは好きなんだろう。家族の着物は自分で織って自分で縫うのが沖縄の女だ。どうだ。気に入ったか」
「素晴しいですわ、勿体ないぐらい。私に似合うかしら」
「似合うとも。少し地味かもしれないとおふくろが心配していたっけ」

「そんなことありません。大切にします」
「ああ、お前に着させたくて、一反だけは誰へもやらず、呉服屋にせがまれても売らずに置いたそうだ」
「有難うございます」
沖縄のまだ見ぬ姑からの贈り物を抱きしめ、美穂はひとしきり、故郷の姉のことを思い出していた。どうしているのだろう。
日本を出てからもう二十三年にもなるのだ。姉も年老いたことであろう。相変らず、僅かばかりの田畑に獅嚙みついているのだろうか——。
姉もよく紬を織る人であった。祖母に教わった南部紬を。雨の日も雪の夜も機の前を離れない姉であったが、白石へ戻って畑を耕すようになってからは、手が荒れてもう駄目だと姉は機の道具を人に譲ってしまい、夜なべに近所の人に頼まれる仕立物を、眠い眼をこすりこすり縫っていたが、それも、絹物はもう駄目だ。指先に糸がひっかかるとよく愚痴を言い言い、好きだった縫物も遠ざけた。好きな縫物をして坐っていられたら姉もどんなに楽かしれないのに、女の仕立物ぐらいで生計が成り立つほど日本の、東北地方の生活は豊かではないのだ。腰を叩き叩き野良仕事に励む姉、精根かぎり土に挑む姉、もうどのように好きな仕立物を頼まれたとしても、その指先に力はなく、視力も薄れ、たとえ眼鏡をかけたとしてもその眼は霞んでひどく難儀なのではあるまいか、土塊を握りしめ、お前にだけはこんな苦労をさせたくないと言った姉、夜なべに、電燈を低くして背を丸めながら、いつもいつも針仕事に余念のなかった妙の姿が眼に浮ぶのだ。
美穂は成人した甥の禎吉を思い浮べることが出来ない。姉の苦労を少しでも助けてやりたくて、日本へ着いたら、どうかこれを姉へ送ってやって下さいと与那原に頼んだ金も、たぶん姉は喜んでくれたことだろう。女盛りを独身で通し、ひとの産んだ子を育てて、まるで家守のように壁に

へばりつき、ごそごそと動き廻ってその一生を、広い世間も見ずに過してしまった姉は、今は何を考えているのだろう。今頃、故郷の山々は秋の色に染まって、冬籠りの仕度に気忙しいことだろう。大根も干さなければならないだろうし、白菜の漬込みは済んだだろうか。見渡すかぎり広い宮城野、静かに明け暮れる白石の山河、そしてあの岩手山を仰ぐ懐しい盛岡の街、戦争が始まれば、もう二度と再びこの眼で眺めることが出来ないのかもしれない。二十三年もの長い歳月、決して日本も故郷も忘れていたわけではないのだが、異国で帰ることの出来ない故郷を思うほど惨めなことはないのだ。いつも瞼に泛んでくるのは日本の秋であり、冬であり、春であった。美穂は無理にもそれを払い退けてハワイの土に生きて来た。いつかそこへ帰って行く日まで、決して思い出すまいと心に誓って生きて来たのだ。ハワイは常夏の島である。季節が故郷を思い出させないのがせめてもの救いであった。たとえば十月もなかばになり、今頃はさぞ紅葉が綺麗でしょうねと、ふと言葉に出すことがあっても、沖縄出身の与那原は怪訝な表情をするだけである。紅葉の美しさ、素晴しさを説いてみても仕方のないことであった。その点は、亡くなった菊治にしても同様である。数え年三歳で、両親に連れられてハワイへ渡った菊治に、日本の、故郷の思い出なぞあろう筈がない。眼にいっぱい涙を湛えてふる里の思い出を話す美穂を愍れむようにじいっと瞶める人だった。絵ハガキを見せてもまるで花のように綺麗だと言うだけであった。花と紅葉は違う、束の間の紅葉が終ればいっせいに散ってしまうだけだ。花なら散っても、実を結ぶ。未来があるでしょうと、季節の厳しさを語ってもただ頷くだけで、実感はなかった。その虚しさに美穂は何度涙ぐんだかしれない。言葉の虚しさに打ちのめされ、美穂は日本を恋う心を閉すしかなかった。菊治を失い、過去を胸の奥深く封じ込むことが、慣わしのように美穂は異国の土に生きて来たのだ。子供達のために生きていたのだと美穂は信じていた。しかし今はもう自分のために生きているといった考えに変っている。子供のせいにしてはならないのだ。自覚というもの

であろうか、菊治の許に嫁ぎ、菊治を失うと菊治を恋しく思いながら与那原の胸に顔を埋めて眠る自分を憎んだ。憎むことでがむしゃらに生きて来た。しかしいまは違うのだ。この四ヵ月あまりも与那原と別れてひとりの夜を過し、子供達にとって大事な父親である以上に、自分にとっても掛け替えのない夫であったことに気付き、もう帰って来なくともいいと諦めながらも、もう帰って来ないのだと決めてしまうのは辛かった。眠っている間にも何度飛び起きたかしれない。与那原の戻ってくる足音が聴えてくるからだ。闇の中から響いてくる靴の音を幾度聴いたかしれない。今頃帰ってくる筈がないと打消しても、その足音は美穂の体に伝わってくるのだ。失いたくなかった。自分のために、失ってはならない人であった。そう気付いたときの屈辱と絶望と臍を噛むにも似た思いに美穂は何度堕ち込んだことであろう。長く連れ添った夫婦の宿命というものだろうか。しかし、与那原と共にした生活には生きたという確かな手応えがあった。帰って来てほしかった。

それほどの思いで待っていた自分なのに、無事で戻って来た与那原を見ていると、なんとなく腹が立ってくる。頬も心も強張って、美穂は拗ねたような口ばかり利くのだった。

もしかしたら戦争が始まるのではないだろうかといった不安をよそに無事平穏な日々が過ぎて行った。

常夏の島といわれるハワイに、秋はなくともそこはかとなく秋の気配だけは日々濃くなってゆく。甘蔗畑の黍の穂は、青空に揺れて、まるで生れ故郷のすすきの原を眺めているようだ。

豚も鶏もダックも食欲が旺盛になり、丸々と太った。クリスマスを控えて、養豚養鶏業者はこれから目の廻るほど忙しくなる。

カパカヒ・ロード（曲りくねった小径）を、男達は小型トラックで餌運びに余念がなかった。日

米間の雲行きが怪しいと眉をひそめていた男達も、忙しさに追われるとそんなことは無駄話のように思えて、今はひたすら家業に精出しているのだ。

餌をねだる豚の啼き声に美穂も追われる。出来上った餌を手車にのせ、豚舎に運んではスィ、スィスィと運動場の豚達を懸命に呼び込む。十頭の豚を出荷すれば千ドルの金が入るだろう。クリスマスを前にどうしても千ドルの金が欲しかった。いい値で取引きをするためには、豚を丸々と太らせ、一頭の豚も病気させてはならない。細心の注意を払いながら美穂は胸算用をする。どの豚からも眼が放せなかった。今では豚の健康管理は美穂の役目であった。

ダックの卵を籠に詰め、美穂は仲買人の来る日を待った。仲買人の殆んどがシナ人である。美穂はそれ等の人々との掛け引きも巧くなった。シナ人はとかく値切りたがる。新聞によく眼を通してその日、その日の相場を心得、法外な値切られ方をしないように要心しなければならなかった。

長女の聟の劉(りゅう)はコックだから、よく仲買人を紹介してくれるが、どうにも劉は呑気すぎる。娘の初穂も人がいい。劉はそれに輪をかけた男のようだ。劉の紹介だからつい負けると癖になって、相手はそれを相場のように押しつける。美穂は損ばかりすることになるのだ。シナ人はずる賢いと日本人の間では評判が悪かった。劉は特別だよ。劉のような男は珍しいんだと、与那原は褒めているのか、けなしているのかわからないようなことを時々美穂に言う。

「あの男は横着なんですよ」

美穂は吐き捨てるように答えるのだった。

「だってそうじゃありませんか、コックならコックらしく骨身を惜しまずここへやって来て鶏でもダックでも品選びをすればいいものを、自分は坐っていて仲買人から仕入れるんでしょう。金なんか溜まるわけがありませんよ」

仲買人が買い叩きをするときはきまってこれは劉さんのところへ入れる品だからと、美穂の気を引くようなことを言うのだ。そんな劉を責めると、

「けれど世の中はみんなで利益を分け合わなければ住みよくならないでしょう」

と、腕組みしたままでけっけっと笑っている。

「劉は殿様みたいな男だね」

美穂は娘の初穂に八つ当りをするしかなかった。

「お母さん。劉はね、暮してゆかれたら、文句なんか言うもんじゃないって、日本人は働きすぎるって言うんですよ」

喧嘩にもならなかった。人はみなそれぞれの生き方があるのだと思うのだが、日本人は働き過ぎだといわれれば美穂も引っ込みがつかない。

「そうですかね、でもね、少しでも余計に働かなかったら妻子に楽はさせられませんよ。日本人が働きすぎるのは、妻子のことを思うからなんですよ」

「ええ——」

「お前も、もう親なんだから少しは亭主の尻を叩かなくちゃ、日本人の女房を持ったからには、日本人は働き過ぎるだなんて、そんな言いわけは通りませんよ。若いうちは働くものだとうちのおっ母さんが言ってましたと、そう言っておやりよ。お前のお父さんだってよく働きましたからね」

「でも劉は、働くだけで死んでしまったらつまらないって——」

「馬鹿ばかしい。そんなことを考えるのはもっと先でもいいんだよ。年をとれば厭でも頑張りが利かなくなるんだから、劉は百歳までも生きるつもりかね」

美穂は込み上げる怒りを隠せないのだ。初穂は笑っている。決して口応えをしないのだ。夫に

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com